

生みの苦しみ

今は、いつ、だれが学校に来られなくなってもおかしくない状況なので、希望者全員がタブレットを持ち帰っていますね。その分、カバンが重いかもしれません。状況が状況だけに頑張ってくださいね。実は、当初の予定からすると、小中学校にタブレットが導入されるのはもっと先のことでした。感染症がなかなか終息せず、次から次へと波が押し寄せてきていることを考え、いつ学級閉鎖や休校になってもよいように、全国的に導入を早めたのです。

一昨年度末、急に休校になって、三カ月も授業ができない日が続きましたね。休みが長すぎて、皆さんもずっと家にいることが苦痛になったり、授業の進み具合が心配になったりしたのではないのでしょうか。その後も、そういう状況がまた来るかもしれないということ、国を挙げて、小中学生のためにタブレット導入やWi-Fi環境の整備が急ピッチで進みました。そして、現在に至っています。

このようにいきさつで、皆さんの手元に渡ったタブレットです。どのように扱えばよいかということが、皆さんの中では明確になっているでしょうか。小学生なら「くしなさい」「くしてはいけません」という細かな指示が必要でしょう。使うことに慣れるまでは、手取り足取り教える必要があると思います。

中学生はどうでしょうか。やはり細かなことを、いちいち指示をしないと動けないのでしょうか。そこで、発揮してほしいのが「私は中学生だ」というプライドです。小学生と同じように指導しないと理解できないようでは、中学生としていかなものかと思います。

一月二十六日の校長メッセージに書いた「ガキ」の部分を、北中生もどうやらもち合わせています。どういいういきさつで手元に届いたものかが理解できず、動画視聴やゲームといった、不適切な使い方をする生徒。「仲間と共に受けている授業」という意識が薄れ、視聴時に仲間を不快にさせる姿を発信する生徒。……『少年の日の思い出』の中の主人公の少年は、北中にも確かにいるようです。

話の主人公の少年は、確かに「ガキ」でした。しかし、その「ガキ」と決別しました。あれだけ熱中して集めたたちょうですからね。自分の手で一つずつ粉々に押しつぶすということ、少年はしたくなかったはずです。(暗闇の中でやったのは、つぶれていくのを見たくなかったからかもしれませんね。)でも、しなければならなかったのです。それが大人になるということです。

「生みの苦しみ」という言葉があります。何かを生み出す時には、必ず苦しみが伴うもの。その苦しみを乗り越えたところに、新しいものが生まれるのです。タブレットを適切に使えない生徒や、配慮が足りない使い方をしている生徒は、新しい自分を生み出せるでしょうか。生みの苦しみから逃げないように、周りの仲間が支えてやってください。作品の中では、母親がそれをしていましたね。覚えていてくれる？大人へと導いている母親でした。(一月三十一日記)